

## ジーン・バラントイン『教育社会学』の子ども研究への含意

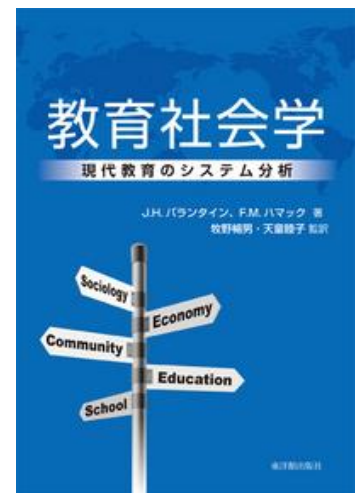
報告者：牧野智和（中央大学等非常勤）

### 【報告の構成】

1. 報告の経緯と目的
2. ジーン・バラントインの描くアメリカ教育の諸論点
3. 開放システム論という統合的アプローチ
4. 「子ども社会」研究／「子どもの社会学的」研究への含意

### 1. 報告の経緯と目的

- 報告の経緯
  - Ballantine, Jeanne. H. and Floyd. M. Hammack, 2009, *The Sociology of Education: A Systematic Analysis* (6<sup>th</sup> Ed), Prentice-Hall. (=2011, 牧野暢男・天童睦子監訳『教育社会学 現代教育のシステム分析』東洋館出版社) の翻訳出版
  - 報告者は全体の要となる 1 章（理論パート）と 2 章（アメリカ教育におけるコンフリクト）を担当
- Jeanne Ballantine とは
  - オハイオ州のライト州立大学教授。教育社会学、社会学、女性研究を手広く行っており、特にその教育に力を入れている…という事で ASA から教育貢献で表彰
  - 『教育社会学』の構成：教育社会学理論、成層化、人種・階級・ジェンダー、学校、生徒、カリキュラム、教育とその環境、高等教育、国際比較（西欧、アジア、アフリカまで）、教育改革、とバランス良く多岐にわたる
- 報告の目的
  - 長い間版を重ね、よく知られたテキストとなっているアメリカの教育社会学者バラントインの著作から、以下のような話題提供を行う
    - ◇ アメリカにおける子ども論の（教育社会学的）論点（2 節）
    - ◇ 諸論点を統合する「開放システム論」というバラントイン独自のアプローチ（3 節）
    - ◇ 翻って日本の子ども社会学研究に示唆できるかもしれないと報告者が思うこと（4 節）
  - （報告者は子ども研究を専門としている者ではありませんので、報告にもとづいて、ディスカッションで相互に学び合うような場になれば、と思っています）



### 2. ジーン・バラントインの描くアメリカ教育の諸論点

#### 2-1. 子どもの初期発達をめぐるコンフリクト

- 幼児教育をめぐる論点
  - 脳科学と初期発達の重要性を背景に…
  - 認知的発達はどこで促進されなくてはならないのか（家庭か学校か）

- 何歳から正規の学校教育が始められるべきか
- 就学前教育は誰のためか：どのような親、どのような子か
- 論争の原因
  - 幼年期社会化プロセスにおける変数の多様性（階級、エスニシティ、地域、宗教、言語環境、家族規模、障害、早期出産、親学歴）：幼児教育プログラム在籍率と経済状態
  - 幼児教育プログラムは誰のためか？：小学校への準備（機能主義）／階級再生産（葛藤論）
    - ◇ 幼児教育の法制化はなかなか進展しない
- 幼児教育プログラム推進派の主張
  - 幼児教育は家庭で得られない有益な学びの経験を提供する
  - 親・きょうだいが必ずしも最良あるいは最も有能な子どもの養育者とは限らない
  - 働く親にとって必要な制度である
  - すべての子どもを同じ「スタートライン」につかせるべきだ
    - ◇ 就学前教育の不備 → 学校への適応（－） → 底辺校…
    - ◇ 就学前教育経験 → 学校への適応（＋） → 発達を助ける
- （早期）ヘッドスタートの効果は立証済／実施規模が小さい：資金の欠如による
  - 「コスト」の多面性の議論へ（National Head Start Association）
    - ◇ 認知的コスト：留年減少、特別教育の必要の減少、成績向上、長期欠席減少、学びへのレディネス獲得
    - ◇ 経済的コスト：長期的にみて、収益、雇用、家族の安定性、福祉への依存度の減少、犯罪にかかるコストは、教育への投資1ドルに対し9ドル削減できる
    - ◇ 社会的コスト：犯罪・問題行動の減少、高いモチベーションと自尊心

## 2-2. 教育現場とメディアに関するコンフリクト

- 2007年版（翻訳書）における最初のトピック：企業広告の学校への侵入
  - 学校へのテクノロジー・資材提供のパートナーとしての企業広告
  - チャンネル・ワン：テレビ機材の提供と見返りとしての広告
    - ◇ チャンネル・ワンのおかげでよい教育ができるようになったという声
    - ◇ 「でも皆がそう思っているわけじゃないよ！Yet not everyone agrees!」
  - 学校は特定の商品への誘導が行われてよい場なのか？
- 2011年度版における最初のトピック：学生は授業中メールを打ち、Facebook や MySpace にアクセスし、ゲームをしている…
  - 「授業中にツイートするのをやめさせよう！」
  - テクノロジーと対峙するか、流れに身を任せるか
    - ◇ 使用の禁止から、情報にどうアクセスし、どう判断するかへ（メディア・リテラシー）
    - ◇ どう授業に活用していくか
- 依然強力な社会化エージェントとしてのテレビ
  - 保育所の70%が日常的にテレビをつけている
  - 年間の学校での生活時間（900時間）＜テレビ視聴（1023時間）、2005年データ
  - 偏見強化とテレビ視聴、暴力行為の継続的視聴は悪影響？…テレビ視聴の影響をめぐるエビデンスの混在
  - テレビのテンポ⇔学校のテンポ

- V チップという規制：規制だけでは不十分で、それを活用する親（市民）のリテラシーもまた必要

### 2-3. カリキュラムをめぐるコンフリクト

- 『危機に立つ国家』（1983）とカリキュラムの「コア」をめぐる論争
  - 伝統的古典か、多文化主義への対応か
- 読み書き能力と社会経済的背景
  - 16歳以上のアメリカ人の14%（3000万人）が「基礎以下」のスキル（最も易しい具象的な読み書きのスキルのみ）
  - 「基礎以下」のグループ：55%が高校を卒業しておらず、44%が学校入学以前に英語を話す環境にない。39%がヒスパニック、20%がアフリカ系アメリカ人であり、26%が65歳以上
    - ◇ 小学校のスタート時点から低学力で、その後も同じ位置に留まり続ける子どもたち
    - ◇ 初期における集中的個別教育、実際の生活に役立つもの（たとえば運転免許取得）と学校の結びつけ
- カリキュラムをめぐるコンフリクト
  - 誰が決定するのか：学校や教育委員会の自律性確保志向と、外部からの要求の綱引き
    - ◇ 中央集権的システム：外部要求はいくつものレイヤーに吸収
    - ◇ 分権的システム（アメリカ）：利害関係者からの要求に直接対応
  - 何が教えられるべきか
    - ◇ テネシー州デートンにおけるスコープス裁判（1925）：進化論を教えるべきか否か
    - ◇ マイノリティ
  - 機能論者：学校は保護的・受容的な家庭環境から、競争的・業績本位の職業世界への移行をすべての若者に準備する
  - 葛藤論者：資本主義社会における支配的集団の価値観が伝達される
  - 学校内外の影響力：地域・州・連邦の法令、認定機関、テストサービス、全国的な研究・調査・改革計画、その他利害集団

### 2-4. 教科書・図書館蔵書をめぐるコンフリクト

- 教科書、図書館蔵書へのクレーム
  - その理由：猥褻、政治的偏見、反道徳的、反宗教的…
  - 歴史的には：『ハムレット』、『ヴェニス商人』、『ライ麦畑でつかまえて』、『怒りの葡萄』、『1984』、『アンネ・フランクの日記』、『ハリー・ポッター』、『シンデレラ』、『オズの魔法使い』、『マクベス』、『ロミオとジュリエット』、『ハックルベリー・フィンの冒険』
  - 発禁のポイント：同性愛、反家族的、反道徳的、年齢にそぐわない、性的内容、薬物、攻撃的言葉遣い、オカルト、暴力
- 論点：米国憲法修正第1項（言論の自由）をめぐる争い
  - 子どものために異議申し立てをする特定の親・集団にそれを踏み越えうるのか
  - 親・集団の背景のバリエーション（地域への影響力、全国的組織との関係）
- 「ライフスタイルをめぐる権力闘争」（ページとクレランド）
  - 権利の剥奪感を抱く集団→発禁要求の表現というカタルシス
  - 「失われたものを求めて」の闘争

- 裁判の判決は一樣ではない

(2006年/2010年に異議申し立ての多かった10冊)

2006年		2010年	
1	リチャードソン／パーネル『タンタンタンゴはパパふたり』	1	ミラクル『インターネット・ガールズ』シリーズ
2	ジーゲザー『ゴシップガール』シリーズ	2	リチャードソン／パーネル『タンタンタンゴはパパふたり』
3	ネイラー『アリス』シリーズ	3	チョボウスキー『ウォールフラワー』
4	マックラー『地球、お尻、それと大きな丸いもの』	4	リー『アラバマ物語』
5	モリスン『青い眼がほしい』	5	メイヤー『トワイライト』
6	シュヴァルツ『怖い話』シリーズ	6	サリンジャー『ライ麦畑でつかまえて』
7	クラッチャー『アスレチック・ショーツ』	7	ピコー『私の中のあなた』
8	チョボウスキー『ウォールフラワー』	8	マックラー『地球、お尻、それと大きな丸いもの』
9	モリスン『ピラブド』	9	ウォーカー『カラーパープル』
10	コーミア『チョコレート・ウォー』	10	コーミア『チョコレート・ウォー』

- 進化論／創造説問題も同様
  - 世代間闘争（年長世代…創造説に親和）、階層問題（低学歴…創造説に親和）、宗教的利害、権力をめぐる闘争という側面がある
  - カリキュラム変更への抵抗はしばしば農村の小さな町から起こる：伝統的信念と価値観の崩壊にまさに直面しているところ（失われたものを求めて）

## 2-5. 暴力と統制をめぐるコンフリクト

- アメリカ学校教育の最大の難点：道徳的権威の衰退
  - 市民的社会化機能の不全（全体システム）⇔教育システムの内的プロセスの不全（特に規律）
- 学校への外部からの影響：特に裁判所
  - 訴訟における判決：教育者の意思決定能力を削ぐような介入容認
  - 教育者の統制能力の損失⇒市民的社会化機能の不全
- 学校における暴力をめぐる状況
  - 10代男子：銃による死>自然死
  - 男子の10%が武器を学校に持ち込む
  - いじめ発生率の上昇
  - それでも学校の外よりは安全だが、学校での暴力は教育の効果を広く低下させ、リスクを抱えた生徒に特にそれは作用する
- 学校の安全についての認識⇔地域社会の安全についての認識
  - ギャングが身近にいる割合
    - ◇ 都市>郊外>農村
    - ◇ ヒスパニック>黒人>白人
- ギャング対応の選択肢：強圧的になるか、保護的になるか（排除か、包摂か）
  - 権威主義的技法（体罰、停学、退学）：裁判所での近年の判決傾向でもあり、平均的な都市部

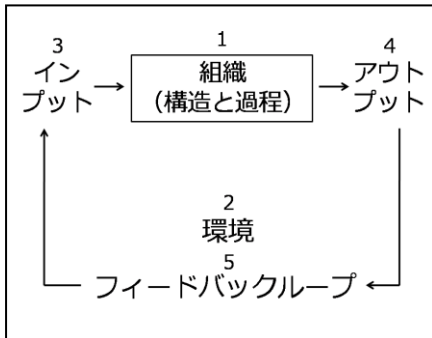
の学校の風土（スクールポリスが常に目を光らせている）

☆ 短期的コスト（現場教師のエネルギー残量への対応）からしばしば用いられるが…再生産される暴力の文化？（かくれたカリキュラム）

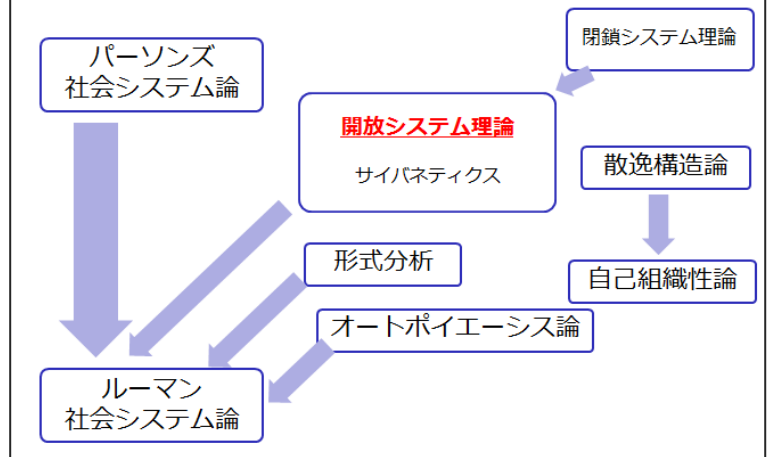
- 保護的技法：地域のボランティアを活用し、懲罰ではなく期待を、禁止ではなく話し合いを活用する
- マイノリティであること、権威主義的技法で統制されること
  - ☆ 教育機会減少、退学率上昇、福祉／司法へ依存する経路といった長期的コストの（再）生産

### 3. 開放システム論という統合的アプローチ

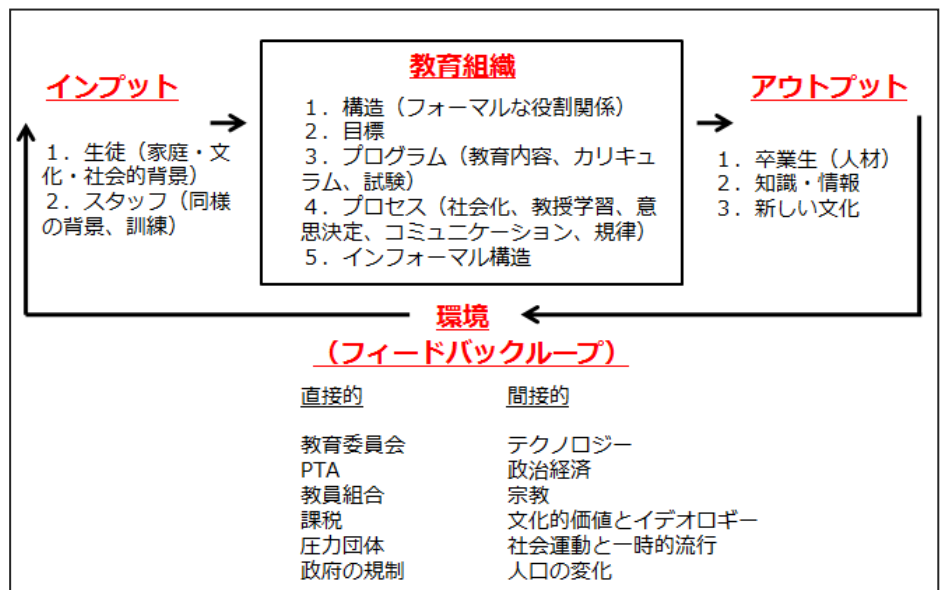
- と、いくつか見てきましたが、バランタインの議論の含意はこうした具体的な話そのものではなく、こうした具体的な話を「開放システムアプローチ」という理論枠組を常に念頭において展開しているところにあると考えられます
- 開放システム論というアプローチ
  - システム論×社会学といえば：パーソンズ、ルーマン？
  - システム論史の別ルートからの学校システム論（→右図）
  - 非常にシンプル、オーソドックスなシステムモデル（↓下図）



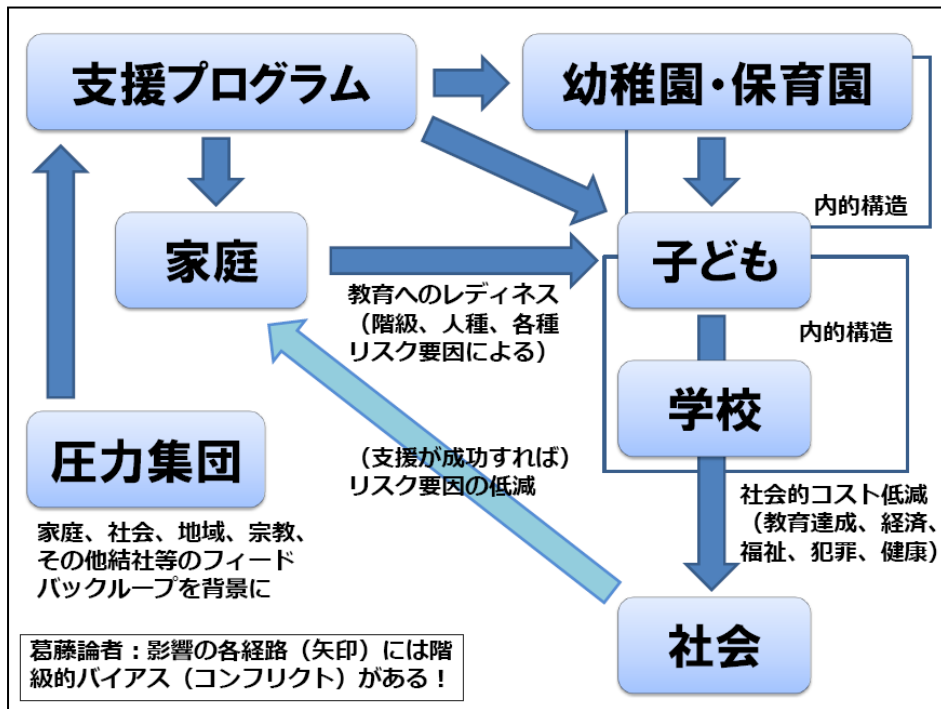
#### システム理論史における開放システム論



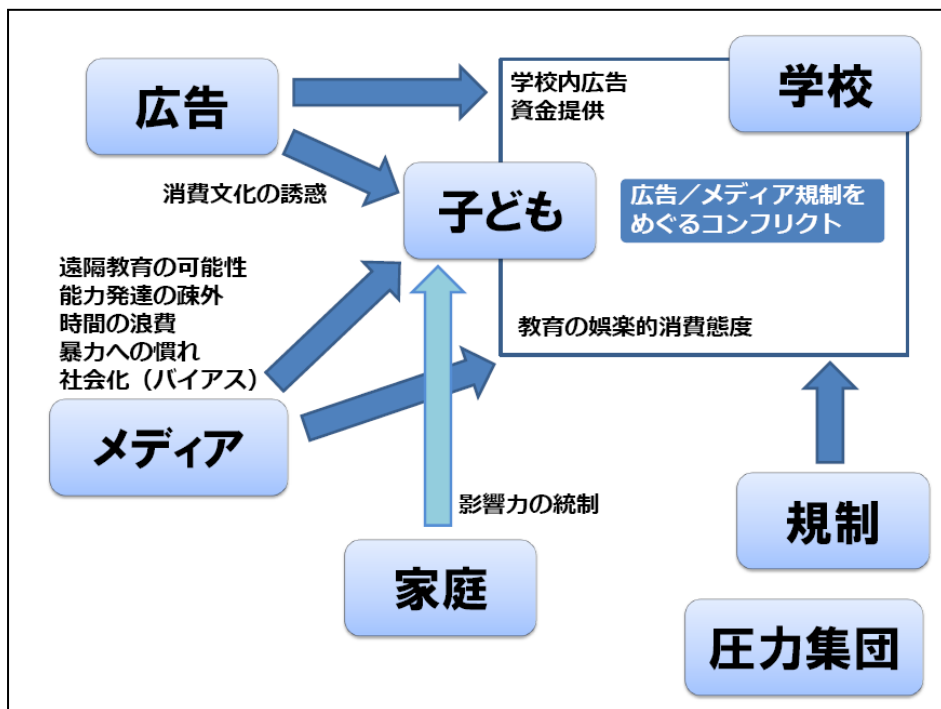
- バランタインによる学校システムの一般モデルは右図→



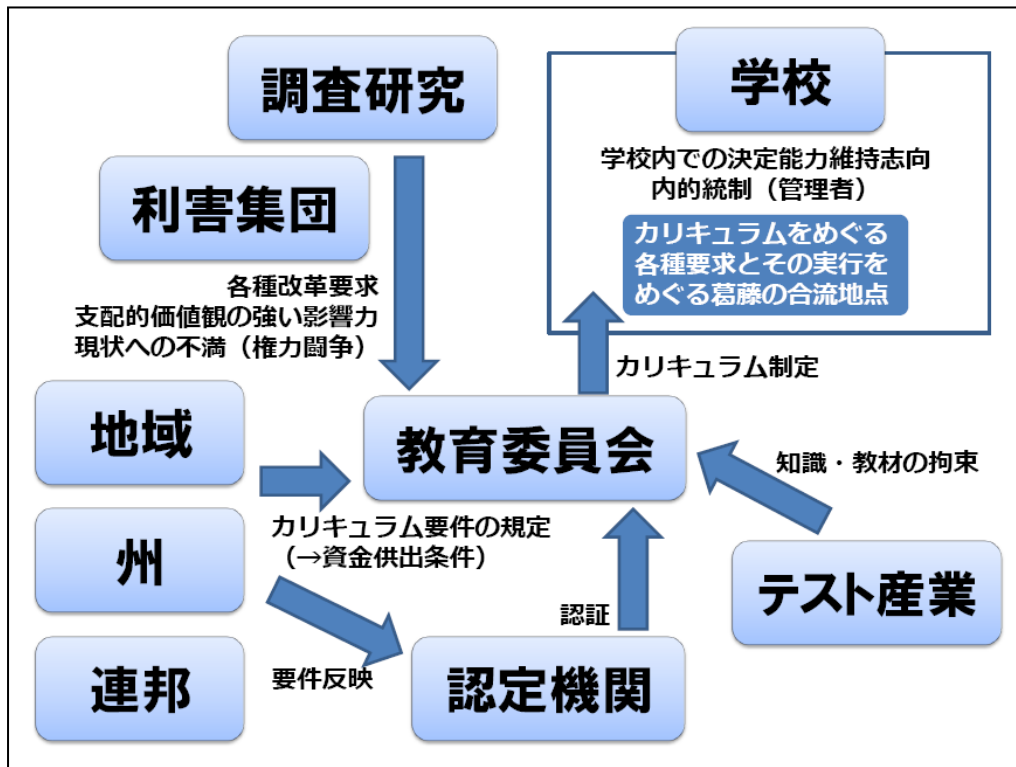
- なぜ開放システム論？
  - アメリカ（教育）社会学の志向と蓄積
  - アメリカ教育の多元性への対応
  - 学生でもわかる、開かれた教育社会学の議論への志向
- コンフリクトの開放システム論的理解①子どもの初期発達
  - 【適切な環境の形成／リスク低減をめぐる多元的フィードバックモデル】



- コンフリクトの開放システム論的理解②教育現場とメディア
  - 【子ども・学校に影響するメディアとその規制・統制要因モデル】



- コンフリクトの開放システム論的理解③カリキュラム（教科書検定・図書館蔵書も近似）
  - 【学校・教育委員会への要求フローモデル】



- バランタイン・開放システムモデルの傾向と教育社会学への含意
  - 「学校／保育園・幼稚園」といった、一つの「開放システム」<sup>1</sup>を中心として、さまざまなトピックに関するアクター間の影響関係を「可視化」という明確な志向
    - ☆ 「多くの子どもたちが一日の大半の時間を過ごす場所は、まちがいなく学校である」(秦 2004: 37)
  - それぞれの矢印、内的構造は探求課題としてさらに精査されていく（教科書として作られていることを考えると、これは研究者だけではなく学生にとっても）
    - ☆ 加治佐（1998）の教育委員会研究、など
- 難点（のようなもの）
  - システムモデルの採用自体は何も生まない（このままではスループット（プロセス）は埋まらず、影響関係も自明ではない）
  - 組織システムを中心に据えることで見過ごされてしまう要素の存在（端的に言えば、子ども…「教育社会学の研究でも子どもを変数としてしか扱わない」(望月 2004: 3))
    - ☆ ただ、これも、位置づけを施しているだけで、探求課題にはなりうる
  - システム概念があまりに旧来的すぎる
    - ☆ 外部環境から自律した構造をもつシステムを措定したとして、その内外の影響関係があまりに素朴に論じられすぎている？（脚注1は、やや報告者の読み込みが入っている）

<sup>1</sup> これは、インプットを司る「ゲートキーパー」や、アウトプットを司る「オーソリティ」といったバランタイン、あるいはデヴィッド・イーストン（Easton 1965=1980）の開放システム論を考慮すると、内的に固有な構造をもち、自律した運動性をもち、外部環境の情報を自らの論理によって取り込むという点では、外部の影響に開かれつつも、部分的には閉じたシステムであるとみることができる。

#### 4. 「子ども社会」研究／「子どもの社会学的」研究への含意

- 『子ども社会研究』「学会紀要の発刊にあたって」（片岡 1995）
  - 10の領域：①子ども自身の文化、②児童文化とマスコミ、③子どもの遊び集団と環境、④子どもと家族、⑤幼児の生活と指導、⑥子どもと学校、⑦中学生・高校生の生活と文化、⑧子どもの福祉と社会教育活動、⑨子どもの社会史、⑩帰国生と子どもに関する国際比較
  - 「教育学・心理学・幼児学は言うまでもなく、文化人類学、児童文化・児童文学・社会福祉学などの専門分野から、純粋な学問研究としてあるいは指導実践として、いっそうの考察が待たれる」（片岡 1995: 4）
- 多様な領域、多様なアプローチ
  - 「学際性」への志向（望月 2004: 3）、第15号特集「子ども社会研究の課題と展望——学際性を求めて」（2009）
  - 会員調査における専攻分野の多様性（武内・浜島 2004: 44）：「保育学・幼児教育学」16.3%、「教育社会学」14.3%、「児童文化」6.8%、「発達心理学・教育心理学」5.4%、「社会福祉・児童福祉」4.8%、「社会教育」4.8%
- バランタインの議論が子ども研究にもたらす含意について
  - 多様な領域、多様なアプローチを、それはそれとして認めつつ、しかし統合・マッピングするような言語的資源（難解なものではなく、誰でも使えるような）になるのではないか？
- 試論：『子ども社会研究』掲載論文のマッピング
  - 第1号から第17号までの研究論文・研究ノート・実践論文（特集論文、研究情報、書評は除く）：135本
- 表1における方法論の分類
  - 量・質的研究が中心：量的研究は初期をピークに減少傾向、質的研究は増加傾向。論考、言説・メディア分析、実践はその過渡期において割合が一時増加
  - （量的研究の多くを占めるのは社会調査だが、心理特性を研究するタイプのものも一定数存在する）

表1 第1号から第17号までの研究論文・研究ノート・実践論文における方法論

	論考	歴史	量	質	言説・ メディア分析	実践
全体	14 10.4%	10 7.4%	47 34.8%	42 31.1%	11 8.1%	12 8.9%
1-5号 (1995-99)	3 7.0%	4 9.3%	21 48.8%	12 27.9%	2 4.7%	2 4.7%
6-10号 (2000-04)	6 17.1%	1 2.9%	12 34.3%	7 20.0%	4 11.4%	5 14.3%
11号 (2005-)	5 8.8%	5 8.8%	14 24.6%	23 40.4%	5 8.8%	5 8.8%

表2 第1号から第17号までの研究論文・研究ノート・実践論文におけるテーマ

	子どもの遊び・文化・世界	価値意識・学習態度	認知・発達	学校・保育園・幼稚園	教育問題・マイノリティ	社会化・影響力(主にメディア)	入学試験	進路・職業移行	イメージ(子ども観など)	家族	地域と子ども	学校外組織・環境	海外研究	その他
計	22 16.3%	13 9.6%	4 3.0%	31 23.0%	8 5.9%	26 19.3%	2 1.5%	7 5.2%	9 6.7%	11 8.1%	2 1.5%	10 7.4%	5 3.7%	4 3.0%
1-5号 (1995-99)	16 37.2%	2 4.7%	2 4.7%	6 14.0%	1 2.3%	8 18.6%	1 2.3%	2 4.7%	5 11.6%	4 9.3%	0 0.0%	1 2.3%	0 0.0%	1 2.3%
6-10号 (2000-04)	3 8.6%	4 11.4%	0 0.0%	9 25.7%	1 2.9%	10 28.6%	0 0.0%	1 2.9%	1 2.9%	2 5.7%	2 5.7%	1 2.9%	2 5.7%	2 5.7%
11号 (2005-)	3 5.3%	7 12.3%	2 3.5%	16 28.1%	6 10.5%	8 14.0%	1 1.8%	4 7.0%	3 5.3%	5 8.8%	0 0.0%	8 14.0%	3 5.3%	1 1.8%

※テーマについては、二つ以上のテーマを扱う論文があるため、その場合は複数カテゴリーでカウントしている。

● 表2におけるテーマの分類

- 何らかのかたちで「学校・保育園・幼稚園」を扱うものが多い(プロセス、制度、教員、指導法など)
- 次に多いのが「社会化・影響力」(プロセス、ジェンダー、メディアの影響、暴力など)
- 三番目は「子どもの遊び・文化・世界」(遊び・文化、子ども世界の秩序、仲間集団など)

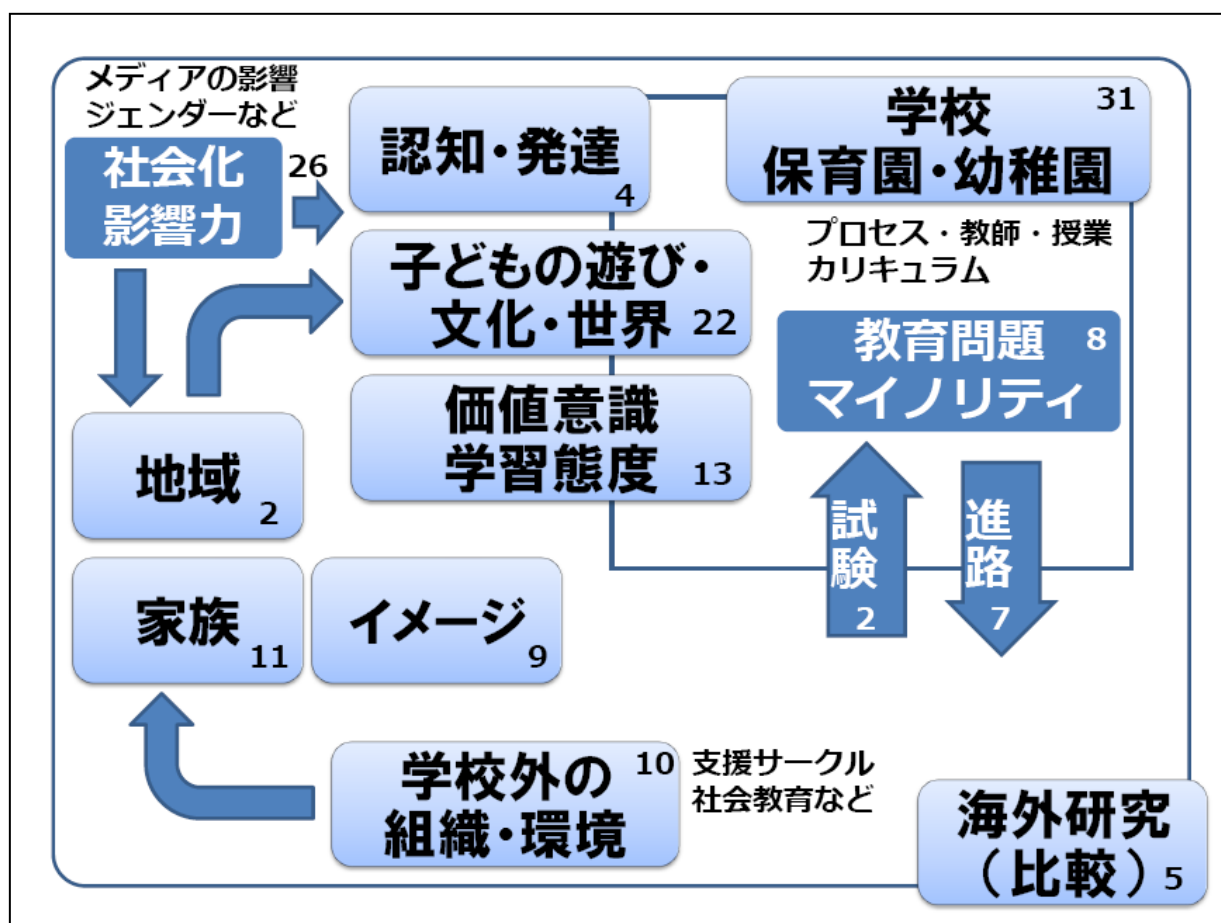
● 傾向の推移

- 初期:「子どもの遊び・文化・世界」が圧倒的に多い(が、急激に減少していく)
- 中期:「学校・保育園・幼稚園」「社会化・影響力」で半数を占める状況に
- 近年:「教育問題(いじめなど)・マイノリティ」「学校外組織・環境(子育て支援サークルを扱うものが多い)」を扱うものが増えてきている

● 『子ども社会研究』の開放システム論的整理とその含意

- 多様なテーマ、多様なアプローチを共存させつつ、各テーマ・アプローチがどのように「子ども社会」研究として繋がるのか(あるいは相反するのか)、その理解を促進することができる
  - ◇ 「学際的ではなく、学融的となること」(倉持 2009: 36)
  - ◇ 「『子ども社会』の解明に際して真に『学際的』であるためには、多様な専門性をもつ個々の研究者が、相互にどのような課題や視点や方向性を共有するのか、あるいは共有しうるのかを、学会として議論し、明示することが大切である」(高旗 2009: 47)
- バランタインの議論を拡張して用いるならば、「学校・保育園・幼稚園」だけでなく、「子どもの遊び・文化・世界」もまた、一つの「開放システム」として捉え、その内外について考えることができる

- ◇ (子どもの仲間集団を考察していくには)「子どもの仲間集団に固有の構造と機能の様態こそが本質的な構成要素として、その概念規定のなかに取り入れられねばならない」(住田 2004: 13)



## 参考文献

- Ballantine, J. H., and F. M. Hammack, 2009, *The Sociology of Education: A Systematic Analysis* (6<sup>th</sup> Ed), Prentice-Hall. (=2011, 牧野暢男・天童睦子監訳『教育社会学——現代教育のシステム分析』東洋館出版社)
- , 2011, *The Sociology of Education: A Systematic Analysis* (7<sup>th</sup> Ed), Prentice-Hall.
- Easton, D., 1965, *A Systems Analysis of Political Life*, John Wiley. (=1980, 片岡寛光監訳『政治生活の体系分析』早稲田大学出版部)
- 秦政春, 2004, 「学校研究の立場から」『子ども社会研究』10
- 加治佐哲也, 1998, 『教育委員会の政策過程に関する実証的研究』多賀出版
- 片岡徳雄, 1995, 「学会紀要の発刊に当って」『子ども社会研究』1
- 倉持清美, 2009, 「学際性を求める子ども社会研究の課題と展望——心理学研究の立場から」『子ども社会研究』15
- 望月重信, 2004, 「『子ども社会研究の可能性』を探る」『子ども社会研究』10
- 住田正樹, 2004, 「仲間集団研究の立場から」『子ども社会研究』10
- 高旗浩志, 2009, 「学校教育研究の立場から」『子ども社会研究』15